○○○じまい

岩内古宇郡医師会
いわない眼科クリニック
寺山亜希子（てらやまあきこ）

最近よく目にする言葉で、比較的年齢層の高い人に関わりのあることが多いのではないでしょうか。何個の○○○じまいの言葉を思い浮かべたでしょうか。改めて説明することではないとは思いますが、じまいとは漢字で仕舞（い）と書き、名詞に付いて、それを終える意を表すそうです。

眼科医の私が多く経験するのは、患者さんの車の免許（車）じまいです。警察で視力検査がダメだったと更新日ぎりぎりで受診します。白内障であれば手術で視力は上がり、免許更新は可能になります。黄斑変性症などは治療によって視力が上がる可能性は少なく免許更新は厳しくなるため、どうか白内障でありますようにと思って診察を始めます。

私にとって近々の課題は年賀状じまいです。年賀状じまいは全員に？一部の人に？なのでしょうか、それも人それぞれなのでしょう。私が年賀状を書くのは、普段会えない仕事関係の方にお礼と感謝を、以前親交のあった方への自分の近況報告が主です。自分の近況報告は相手が不要と思っているなら、さっさと年賀状じまいをしたほうがよさそうです。切手代も馬鹿にならないし、書く手間（ちなみに私はあて名は手書き）もあるし、年賀状を出す意義もわからないし（ただの慣習）、止める理由はたくさんあるのに、昭和脳の私はなかなか決断できません。

そしてもうすぐ間違いなくやってくるのが実家の家じまい、墓じまいになります。家じまいは、時間と何を捨てるかという決断力とお金でどうにかなりそうです。全て捨てることにして、業者に丸投げしてしまえば楽に終わりそうです。

墓じまいは両親が入るであろうお墓を自分だけでなくそのお墓に入る可能性のある人の意見も聞かなければならず、そのうえ、誰がそのお墓を維持していくのかなどそう簡単ではないようです。ただ、私が墓じまいをしなくてはいけないのは間違いなく、そのためにはどんな方法があるのか少しずつ情報収集しようかと考えています。

そして最後にクリニックじまいです。周りでも耳にすることが増え、私自身も最近よく考えるようになりました。自分の体力や気力、仕事の正確性やスピード、患者さんに求められる医療の変化、行政から求められるハード面など、今まで通りとはいかないことが多くなってきました。充分な数のスタッフと充分なスタッフの報酬、最新の器械の購入費、建物の維持・管理を何十年も上がらない、むしろ下がり続けている診療報酬でこれからもクリニックを継続できるのかどうかという不安もあります。そこに山があるから登るのだと同様に、そこに患者さんがいるから診るのだと単純にはいかなくなってきているようです。

皆さんはいくつの○○○じまいをしましたか。

妹

旭川医科大学医師会
旭川医科大学
滝山由美（たきやまゆみ）

夜の雪は明るく、まして雑貨店の店先は煌々と。肌を突き刺す１月の寒さは、子供の頬を容赦なく霜焼けにする。

中学生となっていた私は、帰りが遅いときのためにバス代を親からもらっていた。２回貯めると、あんまんが２個買えた。

私には二人の妹がいる。年子と５歳下の妹である。親は忙しく、そして三姉妹も忙しかった。毎日、習い事が詰め込まれ、一番下の妹は幼稚園の時からベビーシッターよろしく、私たちと次から次へと習い事に歩いていた。

たぶん、親も忙しいから、子供の教育が疎かになることを恐れて、私たちのスケジュールを作ったのではないだろうか。子供をもって実感した。塾には週２回通っていた。一番下の妹も、塾の先生の奥様に勉強を教えてもらっていた。帰りは、冬は真っ暗で、３人で手をつないで20分くらいの道を歩いていた。おなかはペコペコであったし、家に帰っても、大人好みの食事が待っていた。中学生になりたての私と小学生の妹たちは、お小遣いを貰うわけもなく、お年玉も親が管理していた。自由になるお金は、私のバス代だけだった。いつも塾の帰りに雑貨店の前を通った。硝子の引き戸の向こうに、あんまんが専用ケースに入ってこちらを見ていた。たまに、コンビニで見かけるが、50年たっても、あのケースは変わらないように思える。

私は、この日を考えていた。妹たちにも言わないでいた。親に知られると買い食いをすると怒られるのがわかっていたから。

「ちょっとここで待っていて」私は、外にこちらを不思議そうにみている妹たちを置いて、中に入った。「あんまん２個ください」残念ながら３個は買えなかった。あんまんは白い袋に湯気を立てて収まって、私はなけなしの硬貨を手渡しした。

「内緒だよ」

妹たちはパーッとはじけた笑顔になった。ホカホカのあんまんは、一層の湯気を立ち上げ、私たちの口へと飲み込まれていった。あっという間に食べてしまった後、残りの２分の１個を３等分して食べた。食べ終わった後も「美味しいねえ」と口々に言いながら、極寒の１月を歩いた。

秘密は守られた。両親はこの小さな秘密を知らないで、今、天国にいる。

妹たちの幸せそうな笑顔。もう一度見たい。そう思って、大学生になっても、医者になりたての時も、東京で暮らす妹たちにご馳走していた。掌に握りしめられた硬貨は、カードになった。

あの笑顔が見たい。幸せが見たい。だって、見ていると私はとても幸せなのである。